

ミャンマー西部国境地域の現状とNGOによる開発協力活動

東 村 康 文*

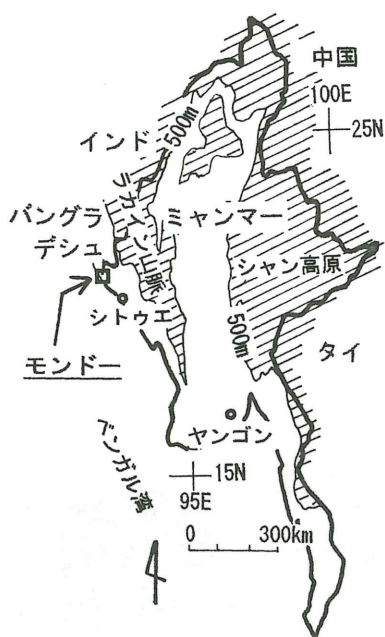
1. はじめに

開発途上国の国境地域では、複数民族の共存、隣国との政治的関係などのために常に不安定な状況であり、また貧困、厳しい自然条件、インフラストラクチャーの未整備など多くの問題をかかえている。

ミャンマー西部でバングラデシュと国境を接するラカイン州モンドーでは、1991年に25万人の難民がバングラデシュ側へ逃げ、93年から国連やNGOの協力による難民のミャンマーへの帰還と開発協力が始まった。

本論ではミャンマー西部国境地域の状況、そこで取り組まれている国際的な開発協力活動の内容、開発協力の今後の課題について、特に日本のNGOが実施しているプロジェクトに焦点をあてて紹介したい。

2. 地域の状況



第1図 ミャンマー西部の国境の町モンドーの位置

首都ヤンゴンから西へ約500kmのところ、ラカイン州モンドーがある（第1図）。ベンガル湾から吹いてくる南西モンスーンによって、年間に約5000mm以上の降雨がある。ヤンゴンからは陸路ではアクセスできず、飛行機と船を使ってたどりつく。ヤンゴンから飛行機に乗り、ラカイン州の州都のシトゥエまで行き、次の日に船に乗り換えてマングローブの茂る川をまる1日かけて上っていく。モンスーンの時期には、風と雨により、飛行機の離着陸ができない場合もあるので、ヤンゴンやシトゥエで何日も足止めされることもしばしばである。

モンドーで最も多数派の民族はバングラデシュの民族に近い、ロヒンギャ族である。ベンガル語を話し、イスラム教を信仰する人たちであり、この地域の人口の90%以上を占めている。次に多いのがアラカン族で、比較的ビルマ族に近く、言語もビルマ語と若干アクセントが異なる程度である。数は少ないが、インド系の民族もいる。一方、ミャンマーの多数派民族であるビルマ族は、ヤンゴンの中央政府から派遣されて役所などで働く限られた人たちのみが居住している。

平野の大部分は水田が広がっている（写真1）。水田には灌漑設備はなく、6月頃におとずれるモンスーンを待って苗を植え、10月～11月に収穫する。モンスーンの初期と末期にはベンガル湾で発生したサイクロン



写真1 牛を使って田を耕す少年（1997年6月21日）
田の背後にはヤシ林に囲まれた集落がある。

*ブリッジ・エーシア・ジャパン



写真2 サイクロンの豪雨と満潮とが重なり田が水びたしになった(1995年5月16日)

がしばしば多量の雨と強い風をもたらす。汽水域なので、潮の干潮満潮ともなって川の水位が上下する。サイクロンと満潮が重なったときには、川から水があふれ出て、水田や村を覆いつくす(写真2)。稲の生産にとって大きな痛手は、穂が実るモンスーン末期ころのサイクロンであり、風によって稲が倒されてしまう。

この地域の多数を占めるロヒンギャ族は雇われの農業労働者として働いたり、薪売りや荷運びなどの日雇いの労役をして、その日その日を食い繋いでいる。土地は限られた地主のものだったり、あるいは国の土地だったりするので、自由に使うことができない。

公務員でも給与は非常に低く、高校の先生で月に約600円程度の給与である。それだけでは暮らしていけないので、早朝や夕方に学習塾を自分の家で開いてアルバイトをしている。公立病院の医者も同様で、それぞれが自分の家などを利用して開業して副収入にしている。



写真3 黒装束を着て道を歩くロヒンギャ族の女性(1995年4月30日)
道路の向こうは高い塀で囲まれた家である。

住居は、簡単な木で組まれた高床式づくりであったり、さらに貧乏な家では小さな竹づくりの住居である。ロヒンギャ族の場合は、一夫多妻の場合もあり、またひとりの妻で10人近くの子供がいたりするので、ひとつの家屋にかなり多くの人数が暮らしている。ロヒンギャ族の住居は、家の周囲が竹を編んだ高い塀でめぐらされている(写真3)。これは、中にいる女性を外から見られないようにする習慣からである。女性は14歳をすぎると、黒や緑の装束をすっぽりかぶって顔を見られないようにして歩く。

ここでは、主食である米の値段が、ミャンマーの他の地域に比べて非常に高いため、貧困層の家計を圧迫している。これは国境地域という特殊な事情で、物質の輸送の際に通行料が必要だったり、輸送のための道路が整備されていないため輸送が困難をとまうこと、輸送のための車や自転車の数が限られているので輸送費が高くつくことなどが考えられる。また、お米を買うのが精いっぱい野菜や肉類など買う余裕がない。市場に出る野菜の種類も非常に少なく、季節ごとに数種類の野菜が売られているのみである。これは気候や土壌条件によるのか、栽培作物が規制されているためなのか原因は不明である。

栄養不足のうえに、マラリヤによる発熱などがきっかけになって死亡率を高くしている。アラリヤ蚊は、夜寝るとき蚊帳を吊ることで防ぐことができるが、貧困な家では蚊帳を買うことができない。

5月中旬～10月の雨期中には湿度が高く雨が降りつづき、感染性の病気がはやりやすくなる。高床式の住居に住めばまだましであるが、貧困な家では、竹を編んで囲っただけの家で、湿った地面の上で生活をして



写真4 簡単な木材と竹でつくられている小中学校(1996年11月12日)
サイクロンの風で簡単に壊れてしまう。

いるので、病気にもかかりやすくなる。さらに11月～2月には大陸からの北東モンスーンが吹き降りてくるので気温が下がり、被服の十分持てない貧困層には寒さが切実である。3月～4月には気温が急激に上昇し、日中の気温は40度近くまで上がる。飲料用などに使う井戸の水位は下がり、川や池の水も少なくなり、汚れた水を飲むことになる。

さらに基本的にインフラストラクチャーが不足している。小中学校は簡単な木や竹でつくられているために、サイクロンが来るたびに倒壊してしまう(写真4)。道や橋も簡単なつくりのために、雨期中の雨で通行できなくなり、また流されて、村と村との間を行き来できなくなる。

3. 国連とNGOによる開発協力活動の概要

このような状況の中、国際機関が地域開発プロジェクトを行っている(第1表)。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)は、国際監視によって難民の安全を確保するとともに、学校や道路、橋などのインフラストラクチャーの整備を行っている。WFPは帰還難民への食料の確保、道路づくりなどの労働に出た人への食料配給、女性の教育推進のために、女子が学校に

第1表 モンドーで活動する国際機関他(1997年現在)

国連機関	UNHCR	国際監視による難民の安全保障 学校建設、橋、道路づくり 難民帰還と定住促進の事業の総括
	WFP	帰還難民への食料配給 道路・橋建設などの労働提供者へ食料配給 学校へ通う女子への食料配給により 教育機会の提供
	WHO	保健教育
	UNDP	プロジェクト可能性調査中
NGO	BAJ (日本)	難民定住事業に関わる車、ボート修理 地域青年の技術訓練による所得向上 小中学校の校舎建設、橋建設他
	AICF (フランス)	井戸掘りにより、地域へ飲料水供給
	GRET (フランス)	小規模な資金を貸出し、地域住民の 所得向上
	MRCs (ミャンマー)	地域診療所を拠点に総合的に衛生改善、 所得向上など
	MMCWA (ミャンマー)	衛生教育、家庭計画

通うと食料を配給するなどのプロジェクトを行っている。WHOとUNDPも活動を開始した。NGOは5団体が活動している。日本からはブリッジ・エーシア・ジャパン(BAJ)が車やボートの修理と地元の青年への技術習得による所得向上をめざした技術訓練を実施している。フランスのNGOは2団体あり、井戸掘りのプロジェクトと小規模金融のプロジェクトを行っている。ミャンマーのNGOも2団体が活動している。ミャンマー赤十字(MRCS)は、衛生改善や所得向上などの総合的な取り組みをし、ミャンマー母子保健協会(MMCWA)は、衛生教育と家族計画を組み合わせた活動を行っている。

これらの活動は、基本的には各機関ごとにニーズ調査が実施され、それぞれが独自のプロジェクトを展開しているが、定期的に相互理解のミーティングが開かれ、互いの活動がオーバーラップしないようにしたり、共通の課題に対して協力して対処している。

4. 日本のNGOによる開発協力活動

日本のNGOであるブリッジ・エーシア・ジャパン(BAJ)は、1995年からプロジェクトを開始した。BAJでは地元の青年に対する技術訓練を行っており、10の分野について数ヶ月単位の技術訓練コースを開催している(第2表)。技術を習得することによって、仕事につける機会を増やし、所得の向上を目指してい

第2表 ブリッジ・エーシア・ジャパンによる
技術訓練、建設、試作品

	内 容	
技術訓練	1.	自動車エンジンの基礎理論、修理コース
	2.	単気筒ディーゼルエンジンの基礎理論、修理コース
	3.	電気と溶接の基礎技術コース
	4.	一輪車・リヤカー・サイカなどの製作コース
	5.	家具製作コース(一般家具、学校教室用机イス)
	6.	裁縫研修コース
	7.	小中学校建設のための大工・左官作業コース
	8.	小規模橋梁の建設コース
	9.	コンクリート製品製造研修コース
	10.	簡易井戸掘り研修コース
建設他	1.	小中学校校舎の建設
	2.	小規模橋梁の建設
	3.	レンタルショップ兼小規模修理工場の建設と運営
試作	荷車(一輪車)	簡易井戸掘り機器
	リヤカー	手動式揚水機
	荷車付き自転車	水を運ぶための荷車
	各種家具	エネルギー効率の高いオープン
	風車発電機	他

る。内容は、自動車エンジンや単気筒ディーゼルエンジンの基礎理論と修理を習得するコース、物をつくる技術を身につけるための溶接の技術、一輪車や家具などの製作技術、縫製技術の習得コースがある。また建設技術については大工・左官作業、小規模橋梁建設技術、コンクリート製品製造技術、簡易井戸掘り技術の習得のコースがある。建設技術については、on-the-job-trainingの方法で、実際に村において建設作業をすすめながら技術習得ができるようにしている。

これらの技術訓練コースに参加した青年（女性も含む）は、訓練期間中の数ヶ月は、毎日の生活に必要な米の配給を受けることができる。

地域の開発において、こういった教育機会の提供は、人材を育てるという意味と、所得を得るチャンスを増やすという意味から重要である。貧しい家の青年は日銭を稼ぐのに精いっぱいなので、教育を受けたり新しい技術を習得する余裕がなく、貧困から抜け出すことができず悪循環が繰り返されていた。技術訓練を提供し、その訓練期間の米を保証することによって生活してもらい、新しい雇用のチャンスを増やして貧困から脱出することを助けようとしている。また、こういった技術訓練は、村の青年や村人の意識の向上にとっても重要な意味も持っている。

自動車エンジンや単気筒ディーゼルエンジンの修理技術については、現在のところ雇用に結びつく数は限られているが、新しいことに挑戦するという青年達の心を捉え、また機械が動く仕組みを学ぶことで論理的な考え方について学習することが重要である（写真5）。また溶接の技術、一輪車や家具などの製作技術、縫製技術は、基礎的に技術を習得した後に、訓練生自身が自分達で、どういうものが売れるか、役にたつか、材



写真5 エンジン基礎理論、修理技術の研修風景
(1997年2月18日)



写真6 一輪車製作研修の風景（1997年3月6日）

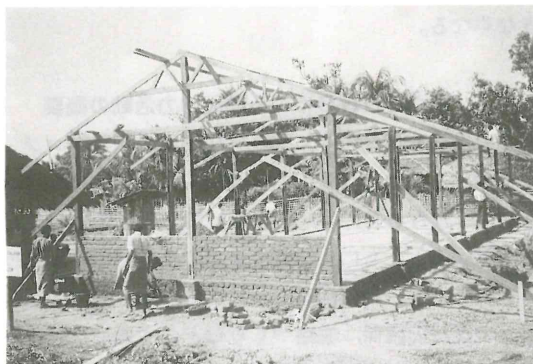


写真7 サイクロンの風雨にも耐える中学校校舎を建設
(1996年2月25日)

料をどうやってそろえて、どうやって形にしていくかということを考えていくことが必要であり、その学ぶ過程が地域の開発にとって重要である（写真6）。

大工・左官作業、小規模橋梁建設技術、コンクリート製品製造技術などの建設技術については、村で実際に建設を行っている（写真7）。技術訓練と学校や橋の建設とを組み合わせ、村の青年達に建設技術を習得してもらいながら学校や橋をつくっていく方法が、地域の人々の理解と共感を得るのに有効である。これは、プロジェクトによって潤うのが訓練参加者だけでなく、建設された学校や橋を使う地域全体の人々だからである。また、村の青年が建設に参加することで、建設された施設は、村人の手でつくられた村の財産であるという認識を村人が持つことができる。また建設費用は、村の中からも寄付を集めて貢献してもらおう形態をとって、村の人々が我々のような外国の援助機関に頼りすぎないようにしている。

以上のような技術訓練とは別に、この地域の開発と貧困層の所得向上に役立ちそうな車両や機器の試作と



写真8 ブリッジ・エーシア・ジャパンによって試作された荷車付き自転車（1997年1月10日）

実用化の実験も行っている（第2表）。そのひとつとして、自転車に荷車を付けた乗り物がある（写真8）。市場などで客を拾い、荷物や人を載せて走り、賃金を得るというものである。これならば、体力のある人ならば、すぐに始めることができる。最初の資本としては自転車と荷車を購入するための約7千円のお金である。NGOの行う小規模金融でお金を借りて、必要なものを購入し、お金を儲けてから月々返済していく。試験的に行った結果では毎日数百円程度の儲けが出ることがわかった。数カ月かければ最初にかかった資本を返済できるはずである。実際に、これが成功するかどうか、今後の結果に待ちたい。

5. 開発協力活動の今後の課題

ブリッジ・エーシア・ジャパン（BAJ）のプロジェクトを中心に、今後の課題について述べる。

開発プロジェクトの長期的継続性の確保：一般的に外国の機関がプロジェクトを行う場合、最初の数年は資金面や技術面で大きくバックアップするにしても、その後、徐々に地元の自治体やボランティアグループにプロジェクトを手渡し、その後の継続的な展開を計る。しかし、ここのような国境地域は中央政府の強力な管理下にあるため、活動の継承は中央政府にゆだねられる可能性が高い。このような場合、中央政府内の担当者との相互理解を促進していくことが重要である。

技術訓練を所得向上と結び付けるための具体的な戦略の検討：多くの貧困層が住むこの地域では、貧困層にターゲットをしぼった経済面での開発が必要である。青年に対する技術訓練を実施してきたが、その技術を使って所得向上に成功した例を、さらに増加させる必要がある。所得向上に結び付けるためのフォローアッ

プの体制が必要である。たとえば、訓練修了生の継続的な技術面の向上をはかる体制、所得向上に結び付けるための調整役の確保、他のNGOが実施する小規模金融との結合、協同組合省などの政府機関との連携などが考えられる。ところで、98年5月に機械や道具を貸し出すレンタルショップを開始した。レンタルショップでは、灌漑用ポンプ、耕運機、荷車付自転車、脱穀機、人力揚水機、井戸掘り機などを貸し出している。これらの機器を買うお金がない村人に対して貸し出し、収入を得る助けにしたり、またレンタルショップに簡単な修理工場を併設し、BAJの技術研修を終えた訓練生を含めた地元の人々に就業の機会を提供している。

女性の自立支援：この地域では女性が教育を受ける機会が非常に少なく、また収入を得る機会も非常に少ない。裁縫などの技術を身につけることができれば、女性が副収入を得て、家計を助けることができる。また女性が技術を学ぶことは、経済的な意味だけでなく、生活における創意工夫の意識づくりにも役立つと考えられる。

インフラストラクチャーの整備：基本的なインフラストラクチャーの不足は、この地域の開発を行う上で大きな障害となっている。雨期中の豪雨やサイクロンによって、村と村をむすぶ交通路が遮断される。雨期中も使える道路の整備や橋の整備が今後とも必要である。またサイクロンによって小中学校の校舎が使えなくなっている村がいまだ多い。引き続き、サイクロンにも耐えるブロックづくりの校舎の建設や机やイスなどの施設が必要である。これらのインフラストラクチャーは、ひきつづき、住民参加型で整備していくことで、村の青年の技術訓練となり、また今後の雇用機会の増大に結びつくと考えられる。

6. 最後に

1995年から始まったブリッジエーシアジャパンのプロジェクトも1995年で5年目を迎えた。今後5年間の活動の質を向上させるために、正確なプロジェクト評価を行う時期に来ている。

プロジェクト評価においては、プロジェクトに関わるミャンマー人スタッフや日本人スタッフが参加し、自ら評価報告書をつくりあげていく過程で、プロジェクトの意味を確認し、今後の方向性や戦略を具体化し、共有化していくことが重要であろう。また外部からの評価も適時取り入れていく必要がある。